

アフリカの奥地の家は、牛の糞を握ねて造った家である。もちろん、テレビもラジオもない。

電気がないのである。食事は牛の血と乳を混ぜた飲み物が并で一日に1杯だけである。陽が落ちれば寝る。私はアフリカで人の幸せについて考えた。知らなければ知らないで、なければないで、幸せなのではないか。人は溢れるともっと欲しくなる。「戦争」が始まる。

マサイ族の腰は私の目の辺りまである高さだった。視力は5・0はあるのではないか。マサイ族は「ルック」と英語で言い、遠くを槍で差した。私には見えなかったが、走っている女の

「ミナー」で島原の島原翔南高校を訪れたことがある。いまは、老いと腰痛で若い人に譲っている。老いとは、譲ることである。生きることも譲る。「檜山節考」

もある。うまかった。店の女の人に「これは蕎麦なのですか、うどんなのですか」と尋ねると、女の人は愛想なく「六兵衛」とだけ応えた。愛想がなかったのは、その質問に飽きていたから

摩芋の粉と山芋をつなぎにした保存食で救った深江の名主である。父は「わずか16歳で」と天草四郎を語っていた。「島原・天草の乱」は舞台劇「古渡り峠」で詳しく書いた。

父はクリスチャンに興味を示していた節がある。長崎の大浦天主堂の話をよくしていた。新聞は「赤旗」も読んでいた。父は、「赤旗」を配達する年配の品のいい婦人と、縁側で楽しそうに話していた。母はそれを嫌がった。母は気性の激しい人であった。なにかあると、目をつり上げて父に食って掛かった。「俺も木の股から生まれたわけではなか」。父のあの言葉だけは忘れられない。(松浦市出身)

老いとは譲ること

が見る見る大きくなった。スワヒリ語の女の人は素っ裸であった。雪を頂く巨峰キリマンジャロが見える草原は、すべてマサイ族の縄張りらしい。アフリカはいまもあのままかもしれない。

である。翔南高校でアフリカの話をした。島原には貝雑煮という雑煮がある。六兵衛という名の名人がいた。島原の飢饉を薩

である。島原には六兵衛という麵造り

おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜世子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。



私は長崎県の高校教育課が担当する「心に響く人生の達人セ